

## 15 服装造型を通しての人間の表現について

杉野学園女子短大 千村 典夫

服装造型は人間が着装することを前提とする限りにおいて、広義の Utility が介在するにかかわらず、他の実用的造型の如く純粹な抽象造型たりうることは不可能である。又抽象に対立する造型概念としての自然主義的なものも又、一般造型において考察される様なものは見出

されない。そこで、人間と自然との対応関係の形而上学的考察を発想の源として抽象的表現を服装の歴史の上に求めると、結論として古典古代及び現代を除くすべての時代に人間の不在をみとめることになった。

この図式的考察に伴う一種の味気なさは、次に観点を抽象的表現の対概念としての人間主義的なものに求め、人間と服装との結合の状況を性的表徴性に焦点を合せて考察することによって、克服される。性的表徴性の具体的現象の一つである羞恥感情が原始時代よりどの様に発生してきたかと云う民族心理学の諸説を援用しつつ各時代の服装における性的表徴性を比較検討することにより、結論として大きく二つの表現の方法、積極的、直接的表現及び消極的、間接的表現に分類することが出来た。そして前者は所謂自然主義的な古典古代及び、現代の新しいヒューマニズムに通じ、後者には宗教的領域においてとらえられる原始及び中世以降第一次欧州大戦までの服装がこれに含まれる結果となった。そしてこの人間的なあまりに人間的な性的表徴性の考察は、いみじくも前述の形而上学的考察の結論と一致したのである。